

## ニカメイチュウ1化期の集団防除効果

\* 望月正己・\*\* 山崎秀信

\* (富山県農業試験場) \*\* (西礪波農業改良普及事務所)

BHC 剤やパラチオン剤が現れてからニカメイチュウ防除は急速な進歩をしてきたが、1化多発型の富山県では1化期1回の撒布によつて2化期の被害もかなりおさえられるらしいことは過去の試験結果から推定されていたのであるが、それを正しく基礎づけるにはかなり大がかりな徹底した集団防除が必要である。そこで、一応このようなねらいも含ませて実質的且経済的な効果を知ろうとし、福光町西太美校下の10部落をえらび2,255反の面積についてパラチオン剤の集団撒布を実施した。この地は山間の山麓地域であつて地理的には極めて複雑なところである。実施に当つては、1化期集団防除要項をきめ、クラブ員を主体とし、1週間で各部落ごとに全面積撒布を行うこととし、薬剤は試験結果から技術的に考えられる最少量に当るホリドール粉剤反当1.5kg撒粉とし、機具は背負型動力撒粉機とし、散在する小面積の団地では手動撒粉器を用いることとした。撒布適期は当然発生消長から把握する必要があるが、ここでは適期決定圃の成績を参考として6月20日より実施することとした。実施に当つては、まず農業、病害虫、機具、撒布方法などに関する講習会や研究会をそれぞれ開催したほか危害防止については特に注意し各戸に印刷物をくばり、小中学校、駐在所、診療所等の協力を得て万全を期することとした。実施当日は7時30分から作業を開始し、撒布員は30分か1時間で交替することとして19時に作業を終るようにした。修理班では毎日欠かさず機具の整備を行い、ほぼ計画通りの作業を行うことができた。

防除効果について、集団防除地61点、個人防除地12点の平均からみると、撒粉直前の被害莖率をそれぞれ100とすると、調査時の被害莖率は1化期撒粉後の7月2日では集団防除区が66.2%、個人防除区では114.85%となり、さらに2化期の被害、収穫期の調査では集団防除区が64.0%となり個人防除区では67.3%となつた。

経済効果については、収量面からみた被害莖の軽減効果と、実際に要した諸経費などから総合的に検討すべきものであるが、実収面よりの調査はないので、実際に要した経費だけを見ると、農業代が351,840円、燃料及び機具修理代が6,540円、労力費が105人で31,500円、雑費5,000円で合計は394,880円となり、これを反当の経費についてみれば175円となり、個人防除の調査では反当250円ぐらいであるから集団防除の方が効果的であると言ふことができよう。

以上のことから今後集団防除を実施する場合の事項を考えてみると、まず最も大切なことはその防除地区に応じた確実な計画をあらゆる面について樹立することであつて、作業が協同化し集団化すると、よほど確かりした計画をもたないと十分な成功が得られない。さらに、危害防止の問題、集団防除の面積単位の問題、また、撒布作業の方法、撒布技術などについて大いに考慮しなければならないが、撒布技術は単なる集団防除であるとかかなり粗雑になり易く防除効果に大きく影響してくることが多いから特に注意が大切である。

## 本田後期に於けるツマグロヨコバイ発生量の予察法について

望月正己・田口 吟

(富山県農業試験場)

最近のツマグロヨコバイによる被害は苗代及本田初期に於ては薬剤防除が徹底してきたため比較的少くてむしろ出穂期以後の被害が問題となつている。特に昭和30年は晩夏から初秋にかけて発生が甚しく、放置す

れば極めて甚しい被害を現すものと思われた。本虫の発生予察法確立はまさに目下の急務であるといえよう。そこで、比較的乏しい資料からではあるが、一応の考察を試みたので公表し、諸賢の御批判を得たいと